様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ００５５２

研究課題名（和文）英語教育と国語教育の連携に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Empirical Studies on the Intergration of English Education and Kokugo Education

研究代表者
大津　由紀雄（Otsu, Yukio）

関西大学・外国語学部・客員教授

研究者番号：８０１００４１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：英語教育と国語教育を連携させる必要性はこれまで幾度となく叫ばれてきたが、いずれも実効を上げることはなかった。その根本的原因は連携の基盤が明確にされていなかったからである。本研究では、言語の普遍性と個別性・多様性および気づき・意識に関する、関連諸科学の知見を活かし、「ことばへの気づき」を基盤として、英語教育と国語教育を連携させる試みである。本研究では、「英語教育と国語教育の連携はなぜ必要か」という問いに答えることによって連携構想の堅固な基盤を形作り、連携構想の中核概念である「ことばへの気づき」を明確化し、学校教育全体の中で英語教育と国語教育の連携がどのような意味を持つのかを明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は「ことばへの気づき」という基盤を明確に提示することによって母語教育と外国語教育の連携の可能性に新たな視野を提供したことにある。ことに、「ことばへの気づき」という概念の明確化とその発達についての研究成果は単に言語教育の域に留まらず、認知科学全般に大きなインパクトを与えるものと考えられる。
　英語教育と国語教育の連携の考えは現行の学習指導要領にも盛り込まれているが、教室での実践レベルでは十分に浸透しているとは言えない。本研究の成果は連携の考えを反映させた授業実践の在り方を実践例とともに示しており、その社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The need to link English and Japanese language education has been called for many times in the past, but none of these efforts has been effective. The fundamental reason for this is that the basis for such collaboration has not been clarified. This study is an attempt to link English and Japanese language education based on “metalinguistic awareness” by utilizing the knowledge of various related sciences concerning the universality, individuality, diversity, awareness, and consciousness of language. By answering the question, “Why is it necessary to link English and Japanese language education?”, this research has formed a solid foundation for the linkage concept, clarified “metalinguistic awareness” as the core concept of the linkage, and clarified what the linkage between English and Japanese language education means in the context of overall school education.

研究分野：認知科学、言語教育

キーワード：英語教育　国語教育　英語教育と国語教育の連携　ことばへの気づき　言語教育　認知科学　日本語教育　複言語主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

外国語教育としての英語教育と母語教育として国語教育を連携させる必要性はこれまで幾度となく叫ばれてきたが、いずれも実効を上げることはできなかった（研究分担者の柾木貴之による『国語教育と英語教育をつなぐ---「連携」の歴史、方法、実践』（2023年、東京大学出版会に詳しい）。その根本的原因は連携の基盤が明確にされていなかったからである。本研究では、言語の普遍性と個別性・多様性および気づき・意識に関する、認知科学・言語学・英語学・日本語学からの知見を活かし、ことばへの気づき（metalinguistic awareness）を基盤として、英語教育と国語教育を連携させる試みである。本研究の構想は現行の学習指導要領にも反映されており、その基盤の強化と教材の開発を迅速に進める必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的（「なぜ本研究を行うのか」という問いに対する答え）はつぎの３点である。

(1)「英語教育と国語教育の連携はなぜ必要か」という問いに答えることによって連携構想の堅固な基盤を形作るため

(2)「「ことばへの気づき」とはなにか」という問いに答えることによって連携構想の中核概念を明確化するため

(3)「英語教育と国語教育を連携させるためには学校教育全体の中で両者をどのように位置づければよいか」という問いに答えることによって学校教育全体の中で英語教育と国語教育の連携がどのような意味を持つのかを明確にするため

３．研究の方法

(1) 英語教育と国語教育の連携はなぜ必要か：その連携を唱えるのであれば、その根拠を示す必要がある。本研究では認知科学・言語学・英語学・日本語学・英語教育・国語教育の研究成果をもとに、連携の必要性を提示し、研究代表者が提唱してきた英語教育と国語教育の連携構想をより精緻化することを試みた。

(2) 「ことばへの気づき」とはなにか：ことばへの気づきに関する研究は1970年代後半から80年代前半にかけて盛んであった（たとえば、D.T. Hakes. 1980. *The Development of Metalinguistic Abilities in Children*. Springer）が、その後、下火になってしまった。その最大の原因は「ことばへの気づき」という概念の精緻化を怠ったためである。本研究では関連文献の批判的評価を行うとともに、本研究の研究代表者・研究分担者間の意見交換に加えて関連分野の研究者らとの討論を行うことによって、その課題に取り組んだ。

(3) 英語教育と国語教育を連携させるためには学校教育全体の中で両者をどのように位置づければよいか： 本研究の構想では、国語教育は児童・生徒の母語への気づきの発達を促進させ、日本語の効果的使用を支援するとともに、児童・生徒に対し外国語としての英語の学習に資する知的枠組みを提供する意義を持つと考えた。英語教育はその知的枠組みを利用し、

英語の仕組みを児童・生徒が身につけることを支援するとともに、日本語と英語という、それぞれ個別性を持ちながらも同質である２つの言語の視点から「ことば（language）」を複眼的に捉えることによって、言語の相対性を理解する意義を持つと位置づけた。この認識を出発点に英語教育と国語教育を学校教育全体の中でどう関連づけるかを明らかにした。

４．研究成果

(1) 本研究の構想は本研究の研究代表者らの研究努力により現行の学習指導要領にも部分的に反映された。しかし、英語教育と国語教育の連携（学習指導要領の用語では「関連」）が求められているにもかかわらず、実際にどのように取り組むべきであるのかが判然とせず、当惑している教員も多い。そこで、研究協力者はじめ、協力を申し出てくれている教員に依頼し、小学校、中学校、高等学校でどの程度、連携が進んでいるのかを明らかにし、連携を促進させるために今後なにが必要であるのかを明らかにした。

(2) 「１.研究開始当初の背景」の項ですでに述べたように、英語教育と国語教育の連携はこれまで何度も試みられてきたが、おおむね失敗の繰り返しであった。この失敗の歴史を検討し、過去の試みではどのような発想で、どのような連携が行われようとしたのか、そして、それらの試みはなぜ失敗したのかを分析する。その分析結果を踏まえ、現代において英語教育と国語教育の連携はなぜ必要かを明らかにした。

(3) 現行の教科書は学習指導要領に盛り込まれた、英語教育と国語教育の連携にどう対応しているのかを明らかにした。分析対象としたのは小学校、中学校、高等学校の国語と英語の教科書であるが、とくに、小学校での英語教科書の分析に力を注いだ。なお、小学校学習指導要領の外国語活動（現実的にはほとんどの学校で英語活動）に関する部分にも国語との連携が埋め込まれているので、外国語活動用教材も分析の対象とした。

(4) 意識（consciousness）に関する標準的なレファレンス（たとえば、P.D. Zelazo et al.（eds.）*The Cambridge Handbook of Consciousness*（2007,Cambridge University Press）、R.J. Gennaro（ed.）*The Routledge Handbook of Consciousness*（2018, Routledge））、A. Newen et al.（eds.）*The Oxford Handbook of Cognition*（2020, Oxford University Press）などによると、「気づき（awareness）」には意識（化）を伴わないものと伴うものがあるとされる。ことばへの気づきの場合も、多くの２歳児、３歳児はことば遊びうた（たとえば、谷川俊太郎の「かっぱ」）を聞いて笑い出すが、そのおかしさに対する意識は伴っていない。この点、多くの４歳児、５歳児の反応（子どもなりの表現ではあるが同じ音韻の繰り返しがおかしいと指摘できる）とは対照的である。さらに、意識を伴う気づきには気づきのレベルがあり、「かっぱ」の例で言えば、小学校低学年では単に同じ音韻の繰り返しがおかしいと指摘するのに留まる児童が多いが、中学年以降になるとこのうたのおかしさは音韻的なものであって、意味的なものではないと指摘し、それを裏づける例を挙げることができる児童が増加する（たとえば、「「かっぱかっぱらった」を「かっぱぬすんじゃった」と言い換えてもおかしくないもん」（小学５年生））。

本研究での調査により、小学校入学時から小学校卒業時までにことばへの気づきのレベルがかなり深化することが明確となった。そして、中学生になり、英語という外国語に触れることによってさらに深化の程度が増し、ことばの構造を発話意図にしたがって意図的に操作できるようになる（たとえば、あいまい性ambiguityの除去）ことも判明した。

ことばへの気づきのこれまでの研究ではこうした視点が概ね欠けており、それがことばへの気づき研究が1980年後半以降、あまり大きく進展しなかった理由であると考えられる。本研究では、ことばへの気づきに関連する認知科学と言語学などの文献調査を行うとともに、学齢以前の子どもから成人に至るまでのことばへの気づきの発達を調査し、教育効果との関連を明らかにした。

(5) (1)から(4)までの研究成果を取り入れて、教材の開発を行った。作業にあたってはことばへの気づきの発達および全体的認知発達に注意を払うとともに、学校教育全体の中での位置づけにも十分に配慮した。開発された教材は主として小学校の教室で実際に使われ、その効果を確かめることができた。

(6) 本研究の成果を小中高大の教員やことばの教育に関心を持つ一般読者に向けて発信するため、「質問」とそれに対する「回答」という形式で単行本を刊行する予定である。現在は、その「質問」項目の選定中で、2025年には刊行したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計26件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大津由紀雄	４．巻 72 (5)
２．論文標題 書評：柾木貴之『国語教育と英語教育をつなぐ---「連携」の歴史、方法、実践』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 英語教育	６．最初と最後の頁 76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大津由紀雄	４．巻 33
２．論文標題 日本の英語教育	５．発行年 2023年
３．雑誌名 むろのつ	６．最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 庵功雄	４．巻 19 (2)
２．論文標題 日本語表現の改新と「やさしい日本語」－日本語研究者が果たし得る役割	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本語の研究	６．最初と最後の頁 53-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 久保野雅史	４．巻 633
２．論文標題 単語数の急増に歯止めがかからないのはなぜか？－『外国語教育の抜本的教科のイメージ』は抜本的な見直しを	５．発行年 2023年
３．雑誌名 新英語教育	６．最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大津由紀雄	4．巻 61
2．論文標題 指定討論：「小学校での英語学習はどのようにあるべきか」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育心理学年報	6．最初と最後の頁 251-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大津由紀雄	4．巻 －
2．論文標題 名著解題：Carol Chomsky (1969) The acquisition of syntax in children from 5 to 10. MIT Press.	5．発行年 2023年
3．雑誌名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	6．最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣	4．巻 －
2．論文標題 日本における国語教育と外国語教育の接続に関する課題	5．発行年 2023年
3．雑誌名 複言語教育の探究と実践	6．最初と最後の頁 119-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣	4．巻 －
2．論文標題 学校プリントに現れる特徴的な語と文法	5．発行年 2023年
3．雑誌名 学校プリントから考える外国人保護者とのコミュニケーション	6．最初と最後の頁 154-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣	4．巻 －
2．論文標題 国語教育から見たことばの問題	5．発行年 2022年
3．雑誌名 「日本人の日本語」を考える	6．最初と最後の頁 168-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣	4．巻 －
2．論文標題 学校教育における「共生社会のためのことばの教育」の可能性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 共生社会のためのことばの教育：自由・幸福・対話・市民性	6．最初と最後の頁 141-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣	4．巻 －
2．論文標題 「考えを深めましょう！」「え、どうやって・・・？」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 一語から始める小さな日本語学	6．最初と最後の頁 211-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保野雅史	4．巻 71
2．論文標題 東京都スピーキングテストESAT-Jをこう見る：研究者の視点から	5．発行年 2023年
3．雑誌名 英語教育	6．最初と最後の頁 34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保野雅史	4．巻 633
2．論文標題 中学校教科書の変化を『マクロの視点で』分析する ―発音記号は、どうして中学2年の教 科書から登場しているのか？	5．発行年 2022年
3．雑誌名 新英語教育	6．最初と最後の頁 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 庵功雄	4．巻 ー
2．論文標題 母語話者コーパスから見た日本語の受身文	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本語受身文の新しい捉え方	6．最初と最後の頁 61-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 庵功雄	4．巻 ー
2．論文標題 日本語母語話者にとっての「やさしい日本語」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 「日本人の日本語」を考える	6．最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大津由紀雄	4．巻 913
2．論文標題 小学校英語の進むべき道---もっと広い視野から	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育	6．最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大津由紀雄	4．巻 －
2．論文標題 日本型複言語主義についての覚え書き	5．発行年 2021年
3．雑誌名 英語教育の歴史に学び・現在を問い・未来を拓く	6．最初と最後の頁 275-284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣、中俣尚己、大田陽子、 加藤恵梨、 澤田浩子、 清水由貴子	4．巻 33
2．論文標題 日本語話題別会話コーパス：J-TOCC	5．発行年 2021年
3．雑誌名 計量言語学	6．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森篤嗣、田中祐輔、毛利田奈津子	4．巻 4
2．論文標題 分科会1ワークショップ－帰国・外国人児童のためのJSL国語教科書語彙シラバスデータベース『COSMOS』の活用－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 子どもの日本語教育研究	6．最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保野雅史	4．巻 629
2．論文標題 都立高校入試へのスピーキング導入は、どのように決定されたのか？ ―教育産業への個人情報提供・予算支出への違和感	5．発行年 2022年
3．雑誌名 新英語教育	6．最初と最後の頁 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 久保野雅史	4．巻 622
2．論文標題 歴史の教訓から『主体的に』学ぶ ―この道はいつか来た道？	5．発行年 2021年
3．雑誌名 新英語教育	6．最初と最後の頁 7-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 庵功雄	4．巻 －
2．論文標題 日本語の「省略」を支える語彙－文法的システム	5．発行年 2021年
3．雑誌名 語彙論と統語論をつなぐ	6．最初と最後の頁 183-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Isao Iori	4．巻 10
2．論文標題 The lexico-grammatical systems supporting the interpretation of elliptical expressions in Japanese	5．発行年 2021年
3．雑誌名 一橋日本語教育研究	6．最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 庵功雄	4．巻 －
2．論文標題 「は」と「が」の使い分けのあり方を定量的に確認する試み	5．発行年 2021年
3．雑誌名 言語資源活用ワークショップ2021発表論文集	6．最初と最後の頁 198-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 庵功雄	4．巻 58
2．論文標題 基本文型としての「のだ」文―「「のだ」の教え方」再考を含めて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 言語文化	6．最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柾木貴之	4．巻 18
2．論文標題 平川唯一『英語会話』テキストの分析―後のラジオ講座を踏まえて	5．発行年 2021年
3．雑誌名 新 人文学	6．最初と最後の頁 1-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計62件（うち招待講演　43件／うち国際学会　9件）

1．発表者名 大津由紀雄
2．発表標題 ことばの本性と 外国語教育の目的を 忘れなければ未来は拓ける
3．学会等名 梅村学園創立100周年記念シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 大津由紀雄
2．発表標題 「ことばの認知科学」 研究者から見た ChatGPT
3．学会等名 第21回明海大学応用言語学セミナー（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 柾木貴之本に対するコメント
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 言語教育の現状と問題点
３．学会等名 日本外国語教育改善協議会大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 日本型複言語主義の提唱
３．学会等名 言語表現学会研究発表大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 ことばへの気づきとその発達
３．学会等名 宮城学院大学特別講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 ことばの教育の実現に向けて
３．学会等名 宮城学院大学特別講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 現行学習指導要領下の英語教育と大学英語教育の接続
３．学会等名 長崎大学言語教育センターFD特別講演会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 日本型複言語教育の提案---母語教育と外国語教育の一体化
３．学会等名 日本外国語教育推進機構大会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 母語の知識を活かした日本語教育文法について
３．学会等名 北京日本学研究中心講演会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 日本語教育の視点から
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 日本語文法シラバスの再検討
３．学会等名 シンポジウム日本語教育学と日本語学の相互交渉（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 データに基づく文法シラバス
３．学会等名 「現場に役立つ日本語教育研究」全6巻 完結記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 コーパスに基づく語彙指導を目指して
３．学会等名 第16回モンゴル日本語教育シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 生成AIによる日本語教育の可能性：添削・やさしい日本語・文体模写を例に
３．学会等名 The 17th Japanese Studies Association of Thailand (JSAT) Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 国語教育の視点から
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 データに基づく語彙シラバス
３．学会等名 「現場に役立つ日本語教育研究」 全6巻 完結記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 久保野雅史
２．発表標題 公立高校入試への民間検定試験導入：その経緯・実施方法・出題内容の検証
３．学会等名 日本英語教育史学会第39回全国大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 久保野雅史
２．発表標題 ３観点の評価は「生涯学習」の視点を忘れずに ―学び方を身につけるための指導と評価の改善
３．学会等名 全国英語科･国際科高等学校長会研究協議会 神奈川大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 久保野雅史
２．発表標題 英語教育の視点から
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 嶋田珠巳
２．発表標題 言語学の視点から
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 英語教育と国語教育の連携」に対する実践者の認識---国語教員にとっての「意義」とは？
３．学会等名 外国語教育メディア学会関東支部 第149回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育をつなぐ ―「連携」の歴史
３．学会等名 国語を学ぶ会 第137回例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 自著を語る 柾木貴之著『国語教育と英語教育をつなぐ---「連携」の歴史、方法、実践』
３．学会等名 日本英語教育史学会 7月例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 柾木貴之著『国語教育と英語教育をつなぐ---「連携」の歴史、方法、実践』を考える
３．学会等名 本研究公開シンポジウム
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育をつなぐ―「連携」の方法と実践
３．学会等名 国語を学ぶ会 第138回例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育をつなぐ単元づくり－ことばの力を育むために
３．学会等名 日本国語教育学会 第86回全国大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育をつなぐ―教員へのインタビュー調査と新課程の教科書調査
３．学会等名 国語を学ぶ会 第139回例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育をつなぐ ―「連携」の歴史、方法、実践
３．学会等名 岡山英文学会 第45回大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 しりとりと「ことばへの気づき」の発達
３．学会等名 第９回議論型研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 母語の獲得と外国語の学習
３．学会等名 新英語教育研究会関西支部学分会学習会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 「ことばへの気づき」は言語教育にとってどんな意味を持つのか
３．学会等名 関西大学外国語教育学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 いまこそ、ことばの教育を目指そう！
３．学会等名 新英語教育研究会全国大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 生徒の心に火をつける
３．学会等名 ことばのまなび工房連続ワークショップ「英語の教室で何ができるか」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 「んですか」に関する一考察
３．学会等名 日本語文法学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 「は」と「が」の指導法に関する実践報告
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 Grammatical and Lexical Aspects of Yasashii Nihongo (Easy Japanese)
３．学会等名 2022 World Convention of the Korean Language（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 自治体のプレイン・ジャパニーズ推進活動と日本社会の国際化
３．学会等名 JPELC 国際会議 2022（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 プレイン・ジャパニーズと日本社会の国際化
３．学会等名 北東アジア言語文化フォーラム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 「やさしい日本語」の理念と実践
３．学会等名 ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 庵功雄
２．発表標題 学習者の「誤用」から見える日本語の特徴に関する一考察
３．学会等名 日本語教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 日本における母語教育と外国語教育の連携―その歴史の概観
３．学会等名 京都大学国際研究集会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 日本における母語教育と外国語教育の連携―その方法と実践
３．学会等名 京都大学国際研究集会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 続・英語読解力再考 教育現場は「英語が読める」ことをどう捉えているか ―国語力を土台とした英語読解力
３．学会等名 日本国際教養学会全国大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 石橋幸太郎の英語教育論―国語教育との連携を中心に
３．学会等名 日本英語教育史学会1月例会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 平川唯一「英語会話」テキストの研究―先行する「英語会話講座」「実用英 語会話」テキストと比較して
３．学会等名 日本英語教育史学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 英語読解力再考 「英語が読める」とはどういうことか？―国語力を土台とし た英語読解力
３．学会等名 日本英文学会全国大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語科と英語科の連携授業から学習者は何を学んだか―振り返りの自由記述 の分析
３．学会等名 全国大学国語教育学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語教育と英語教育の連携史―明治期から現代までの概観
３．学会等名 日本教育学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 国語科と英語科の連携授業から学習者は何を学んだか―振り返りの自由記述 の分析
３．学会等名 全国大学国語教育学会全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 英語教育と国語教育の連携―文学教材を中心に
３．学会等名 大学英語教育学会関西支部文学教育研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 柾木貴之
２．発表標題 ことばへの気づきを利用した国語科と英語科の連携―その歴史、方法、実践
３．学会等名 東京言語研究所（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 英語教師が知っておきたい、言語学と認知科学
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会10月月例研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 英語教育を英語から解放しよう---日本型複言語主義のすすめ
３．学会等名 AUDELL第3回研究大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大津由紀雄
２．発表標題 スピーキング・テストを 分析する
３．学会等名 第２回北海道新英研　中学英語をオンラインで学びあう会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 話題精通度と言語表現の出現傾向の関係：タ形を例として
３．学会等名 科研費成果物公開記念シンポジウム「話題とコーパスと日本語教育」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 「母語である日本語」の再発見
３．学会等名 第13回産業日本語研究会・シンポジウム グローバル化が進む中での産業日本語 ～様々な日本語使用者間のコミュニケーション～（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 省エネ文法と歩み寄り：最小限必要な文法とその教室活動
３．学会等名 聖心女子大学グローバル共生研究所主催公開講座 地域日本語教室ボランティア養成講座／冬（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 期待される教育実践者の姿は？
３．学会等名 『思考と言語の実践活動へ---日本語教育における表現活動の意義と可能性』　出版記念シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 森篤嗣
２．発表標題 話題に対する知悉度と言語表現の出現傾向の関係
３．学会等名 日本語学会2021年度春季大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保野雅史
２．発表標題 中学校に戻ってきた文法事項---半世紀前の教科書・移行措置教材・現行教科書の扱いを比較する
３．学会等名 日本英語教育史学会第38回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保野雅史
２．発表標題 人を育てる英語教育
３．学会等名 科学研究費公開シンポジウム「人を育てる英語教育」（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計12件

1．著者名 ことばのまなび工房、若林 茂則、大津 由紀雄、吉田 研作、尾島 司郎、中川 右也、柴田 美紀、冨田 祐一、白畑 知彦、松村 昌紀	4．発行年 2023年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 224
3．書名 英語の教室で何ができるか	

1．著者名 遊佐典昭、小泉政利、野村忠央、増冨和浩、大津由紀雄、柳田優子、川原繁人、桃生朋子、磯部美和、大滝宏一、寺尾康、小町将之、杉崎鉱司、木口寛久、藤田耕司、西山佑司、斎藤衛、外池滋生、高橋久子、岸本秀樹	4．発行年 2023年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 400
3．書名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	

1．著者名 大津由紀雄、南風原朝和、久保野雅史、沖浜真治、羽藤由美	4．発行年 2023年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 80
3．書名 高校入試に英語スピーキングテスト？---東京都の先行事例を徹底検証	

1．著者名 教育の未来を研究する会、大津由紀雄	4．発行年 2023年
2．出版社 明治図書出版	5．総ページ数 255
3．書名 最新教育動向 2024	

1．著者名 中俣尚己、森篤嗣、橋本直幸、太田陽子、澤田浩子、清水由貴子、小口悠紀子、小西円、建石始、堀内仁、石川慎一郎、加藤恵梨、橋本直幸、山内博之	4．発行年 2023年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 280
3．書名 話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学	

1．著者名 庵 功雄、志波 彩子、村上 佳恵、大関 浩美、定延 利之、前田 直子、菊地 康人、増田 真理子	4．発行年 2022年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 212
3．書名 日本語受身文の新しい捉え方	

1．著者名 庵　功雄	4．発行年 2022年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 260
3．書名 「日本人の日本語」を考える	

1．著者名 柾木貴之	4．発行年 2023年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 456
3．書名 国語教育と英語教育をつなぐ	

1．著者名 大津 由紀雄、亘理 陽一	4．発行年 2021年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 360
3．書名 どうする、小学校英語？	

1．著者名 大津 由紀雄、今西 典子、池内 正幸、水光 雅則、杉崎 鉱司、稲田 俊一郎、磯部 美和	4．発行年 2022年
2．出版社 研究社	5．総ページ数 368
3．書名 言語研究の世界	

1．著者名 太田 陽子、嵐 洋子、小口 悠紀子、清水 由貴子、中石 ゆうこ、濱川 祐紀代、森 篤嗣、柳田 直美	4．発行年 2021年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 184
3．書名 超基礎・日本語教育のための 日本語学	

1．著者名 田中祐輔、牛窪隆太、陳秀茵、森篤嗣、小口悠紀子、ほか	4．発行年 2021年
2．出版社 凡人社	5．総ページ数 192
3．書名 文字・語彙・文法を学ぶための実践練習ノート	

〔産業財産権〕

〔その他〕

一般社団法人ことばの教育ブログ
https://www.kotoba1.com/

大津研ブログ
https://www.kotoba1.com/blog

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森　篤嗣 (Mori Atsushi) (30407209)	武庫川女子大学・教育学部・教授 (34517)	
研究分担者	久保野　雅史 (Kubono Masashi) (50251070)	神奈川大学・外国語学部・教授 (32702)	
研究分担者	庵　功雄 (Iori Isao) (70283702)	一橋大学・森有礼高等教育国際流動化機構・教授 (12613)	
研究分担者	柾木　貴之 (Masaki Takayuki) (70883320)	北海学園大学・経済学部・准教授 (30107)	
研究分担者	嶋田　珠巳 (Shimada Tamami) (80565383)	明海大学・外国語学部・教授 (32404)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	齋藤　菊枝 (Saito Kikue)		
研究協力者	久保野　りえ (Kubono Rie)		
研究協力者	渡辺　香代子 (Watanabe Kayoko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関